
二週目の勇者「俺」

ジャッカル東西田

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

二週目の勇者「俺」

【Nコード】

N9053Z

【作者名】

ジャツカル東西田

【あらすじ】

最強の勇者としてゲーム世界に転生してしまった主人公であったが、既に大魔王も倒しエンディングも迎えてしまっていたので特になにもやる事が無かった。そんな勇者のこころは荒んでいき……

暇つぶしの午（ひる）（前書き）

主人公が外道です。

心温まる会話も展開も特にありません。

ファンタジー要素もあまり……という胸糞悪くなる話なので、特別な性癖の方のみお進み下さい。 特殊

暇つぶしの午（ひる）

「ヒヤッハアア！種もみを隠そうつたつて無駄だぜえー」

世は大凶作時代。俺は叫んでいた。天にも地にも誰にも恥じることなく。

鉄塊号（馬）の上に乗ったまま、必死に抵抗するヒゲを生やした爺さんから小汚い袋を奪い取る。

「ちッ！何だこれだけかよ？時化てやがんな」

袋の中身を確認し俺は鉄塊号から爺さんにツバを吐いた。

「お、お願いですじゃ。それは村衆が食べるのを我慢してなんとか用意した来年の為の種もみなのですじゃ！返して下され、返して下されー」

爺さんが俺のあぶみに手をかけてくる。チッうぜえな。

「あー分かった分かった。返してやるよ」

手に持った小袋を爺さんに差し出す。爺さんはホツとしたのか暴れるのをやめ袋に手を伸ばした。爺さんが袋を掴みかけたその瞬間

「フレイル！」

俺は炎術系魔法を発動。

袋はその中身ごと燃え上がった。

「ヒヤッハッハッハ？返してやったぜえ？お空になあ？」

呆然とする爺さんを尻目に俺は馬首を翻し荒野へと駆ける。

風が心地いい。

身を切るようなこの風が。

赤い岩棚、砂埃、植物も生えぬ大地。

（嗚呼、ここには余計なものはない）

そう感じながら

「勇者なんて……糞喰らえだ」

そう小さく漏らした彼の独り言は風の中に消えていった。

魔王との謁見（18度目）

「お待ち下さい。少しお待ち下さい？」

そんな声をかけてまわり付いてくる門番を無視し俺は扉を開いた。

「魔王ちゃーん、遊びに来たよ〜〜」

玉座に優雅に腰かけワイングラスを片手に持ったポーズのまま魔王は口からワインを噴出した。

「キツタネエな〜！あ、それはそうと部下に魔王城の掃除ちゃんとさせてる？埃が積もってたよ」

ひとしきり噎せた後、魔王はぎこちなく笑顔をつくる。

「ゆ、勇者殿。ほ本日はどのような御用件で我が城においでに？」

ビクビクとしながら聞いてくる。愛い奴め。

「なんだよ〜用がなけりや来ちゃいけねえのかよ〜？魔王と勇者は親友じゃなかったのかよ〜〜？」

「い、いえ！そんなことは決して。勇者殿と我が輩は義兄弟の契りを交わしておりますればッ？」

ぶんぶんと首を降り否定する魔王。愛い奴め！

「ぶ〜ん、そうか……ならコレ分かるよな？」

そう言っつて俺は気を溜めた。この魔王城を一瞬で消し去るほどの闘気を。

それを見た魔王はガクガクと膝が震え王座から転げ落ちた。側近である門番は口からブクブクと泡を出し気絶している。

「……………ふう」

俺は展開していた闘気を身体の内抑え込み魔王に笑いかける。

「あ、あの勇者殿……これは一体なんな「アゲぽよ〜」!」ので
魔王が喋っている途中で俺は割り込む。

「はっ?」

魔王はよく聴き取れなかったのか間抜けな声を出した。

「おい!『アゲぽよ〜』って言われたら『アゲぽよ〜』って返さなくちゃ駄目だろうがッ?」

「ヒイツ!」

俺の剣幕に怯える魔王。

「はあーっ……怒ってないから言ってみ?『アゲぽよ〜』って俺に返してみ?」

深く溜息をつきながらも、本来なら打ち首の所を聖母のような慈悲深い笑みで諭す。そんな俺の威容に打たれたのか

魔王はこくこくと頷くと

「あ、アゲぽよ……」

なんとか挨拶を返した。しかし

「違うッ?もつと元気よく!『ぽよ〜』の後ろに!(ビックリマー
ク)を三個付けるくらいな気持ちで?」

俺は頭を掻き毟りながら指導。しばらく

「アゲぽよ〜」

「違うッ?」

「あ、アゲぽよ〜!」

「ちよつと良くなった!」

「あげぽよ〜!!」

「惜しいッ?『アゲ』は『あげ』にしなくても宜しい!」

「『アゲぽよ〜!!』!」

「それダッ?」

こんな風景が魔王城に出現した。

一息ついた後

「あの勇者殿、先ほどの『アゲぽよ〜!!!』には如何なる意味が？やはり直前に勇者殿が凄まじい闘気を溜めておられたように極大呪文か何かの詠唱なのですか？」

魔王は心もちワクワクした様子でこちらに尋ねてくる。

(さて、どうしたのか？……ここまで期待している魔王に真実を話すのは余りに酷だ。しかしさりとて「これはスンゲー呪文なんだぜツ！」と欺くのも胸が痛い。ここは……)

「やはりイオナゾン級以上の破壊力なのでしょうなあ……いや、私も1時間以上勇者殿に特訓していただいた甲斐があるというものです！今から使うのが楽しみですな！ハツハツハツ？」

魔王の瞳は子どものようにキラキラと澄んでいた。

そんな魔王に俺は小さな声で

「……………ない」

「はい？勇者殿なんですか？」

一旦笑いを納め、こちらを見つめる魔王。その瞳が相変わらず綺麗に澄んでいたのでイラッと来る。

「意味など……………ないツ！極大呪文でもない。というか呪文ですらナイ？俺はもう帰る、不愉快だ？あとそれと怪物共にキチンとこの城を掃除するように伝えておけツ！貴様の城の埃を吸い込んだせいで一秒でも俺の寿命が縮まったなら、貴様ら全員悪虐の限りを尽くし拷問にかけるからナ」

魔王にそう告げ腹パン。疼くまる魔王を置いて謁見の間を出る。

ムカムカしていたので、とりあえず魔王城の窓ガラスを釘バツト状の武器『穢^{エルムスムス}剝^{エルムスムス}荆^{エルムスムス}梦^{エルムスムス}酢^{エルムスムス}』で叩き毀してから自宅に帰り、魔王からパクツた酒を片手に不貞寝した。

魔王との謁見（18度目）（後書き）

「あげぽよ」回です。

人の話を聞かない奴って面倒ですよね。

なんか突然怒りだしたりとかね。

ダイヤの糞を捨り出せ！

「いいかッ？凡夫勇者パパの精液がシーツの染みになり、淫売僧侶ママの割れ目に残ったカスがお前らだ？じっくり可愛がってやる、泣いたり笑ったり出来なくしてやるッ！」

東トルキス大王国。その中にひとつしかない国立勇者士官学校の訓練用地で俺は教鞭をとっていた。

訓練風景を見渡す俺。の座る『椅子』から

「ギギギギギッ」

という歯軋りのような音が聞こえてくる。

「どうした『凡夫見習い一号』改め『勇者見習い一号』。苦しいのなら降りても構わんだぞ？」

orzのような態勢で俺を背中に載せた勇者見習いは叫んだ。

「レンジャイ？この程度何でもありません、レンジャイツ？」

日中の気温が35 を超えるなか早や2時間。なかなか根性のある凡夫だ。

「痛ぶり甲斐があるのは感心だ。初心者森に行つてゴブリンをフアックしてきていいぞ！」

「レンジャイツ？有り難う御座……」

そこまで言つて勇者見習いは微笑みながら崩れ落ちた。どうにも限界だったようだ。

国立勇者士官学校。

16歳を迎え『天の声』から啓示を受けた王国中の男子を集め

「清く、正しく、美しく！」

を合言葉にプロの勇者になるまで4年間厳しい訓練を課す勇者見習いの為の養成所である。

学費は国王から出ており無料だが、啓示を受ける者が年に4〜5人しか出ない為に強制入学のうえ退学は許されない。

先輩・教官には絶対服従。

座学以外は学年合同で行われる。

俺は週に二度、この国立勇者士官学校で特別教官などを務めている。まあさほど金になるわけではないが、イケメンリア充の上に生まれ落ちた瞬間神から祝福されたという才能溢れるフザケた勇者どもに『如何に自分が甘ったれた存在であるか？』という挫折感を味合わせるのはそれ程悪くはない。

努力すれば大抵の事が叶う人種に

「努力してもどうにもならぬことがある」と教えるのは大切なことだ。

そうすれば自分よりも価値が下の人間に優しくなれるし、尊大で横暴な振舞いもなくなるからだ。

ゆえに俺は奴らを『クソ以下』として扱うのである。

「『魔物マラソン』程度にいつまで俺の貴重な時間を割く気だ？さでは貴様ら『勇者』ではないなツ？スライムのクソを掻き集めた値打ちしかないウジ虫どもツ？」

砂漠のような勇官校第七特別訓練用地。

熱い。そこに居るだけで灼熱のように暑い。

走ろうとすれば足が砂に取られ、また『蟻地獄』などの危険な怪物も自生しているので本来は隊列を組んだ上でゆっくりと進むのが正しい。

しかし、俺はそこをフル装備（フルアーマーで剣盾担ぐ）のまま40km走らせる。おまけに魔王から借り受けた魔物に勇者見習いどもを追わせているのだ。

結果、阿鼻叫喚！

気絶する者、淫売僧侶に祈り出す者、逃走しようとする者も現れた。そして、見事ゴールした猛者どもは俺の椅子にしてやる。

「貴様ら勇者が説く『友愛の心』だ！まさか仲間が未だ苦しんでいるのに自分だけゴールしたから終わりなどと思っていないな？」
そういうと大抵勇者見習いどもは

「ぐぬぬぬッ！」
といった後しぶしぶ俺の椅子になるのだ。

（いやあ〜『友愛』って本当にイイもんですね！）

更に1時間後

「死ぬか？俺のせいで死ぬつもりか？魔王は待つちゃあくれないぞ？とつとと死ねッ？」
かなりの人数がクリアしたが落ちこぼれどもはまだゴール出来ちゃいなかったたので発破をかける。

そしてなんとか全員ゴール。

勇者見習いどもは涙を流して全員で喜び合う。

「へへへ、あいつら胴上げまでしてやがる」

熱い友情に俺の目にも感動の涙がちよちよぎれる。

ま、全員クリア出来なきや連帯責任でもう一度死ぬまで追い込み掛けるからだけどな！

勇者のシノギ 其の一

「今日こそ『ここ』から退去ていそいってもらうからな！」

打ち合わせ通りのセリフが俺の待つ通りにまで響いてくる。

「嫌です！『ここ』は主しゅが住すまう家です。邪悪じあくな者、あなたこそ出ておいきなさい！」

女の叫ぶ声。に混じり小さな子どもの泣き声も聞こえてくる。うるせえなたく。

「そうは烏賊のコンコンチキ。土地の権利書はこっちにあるんだ。

それに今日は凄すごいお方を呼よんである……」

まったくひどい三文芝居だ。脚本書いたのは俺だけだな。

「総代せんせエ！総代せんせエお願いします？」

やれやれ、行くか。

俺はゆっくりとその【教会】へと入っていった。

「ゆ、勇者様ッ！」

俺を見たまだ若いシスターは驚きの表情を浮かべた。

それはそうだろう。第一級勇者なんて滅多に見られるモンじゃない。天然記念物級だ。

「へへ、センセエすいやせん」

黒服の男が頭を下げる。俺は銀縁眼鏡をかけた黒服の肩にポンと手を置き

「さて、何やら騒さわぎになっているようだが……この『勇者』が解決しよう

『勇者』の部分をことさら強調し【仕事】にかかった。

おっぱいのかい（パイオツカイデー）のシスターは語った。
この教会で親を亡くした身寄りのない子どもたちを育てていること。
ある日、賭け事好きの前司祭が教会の土地の権利書を持って蒸発したこと。

翌週から黒服の男たちが現れ権利書を盾に立ち退きを迫られていること……

「ふむ……教会だけでなく孤児院のようなこともしている訳か」
顎をさすりながら餓鬼どもを見る。なるほど、どいつもこいつもキツタナイ格好をしているわけだ。

「はい勇者様の仰る通りです。ここは『空神ゼルデアス』を祭る教会でもあるのですが、行き場のない子どもたちの安息の場でもあるのです」

鋭い目で銀縁眼鏡を責めるように見ながらパイ乙カイデーは訴えてくる。

「なのに……この黒服の男たちは窓から蛇を投げ入れてきたり、薬屋や武器屋から私達が頼んでもいない薬草や武具を届けさせたり、拳句の果てに拡声魔法を使ってわ、わたしの胸のことを『男を惑わす魔乳』と悪く言ったりして……」

「そいつはヒドい」

間髪入れず俺は顔をしかめた。半笑いになりそんな顔面の表情筋を抑えるのに苦労する。

（それ全部俺の指示したモンだしなあ）
と思いつながら……

~~~~~

説明しようッ！

『窓から蛇』  
スネーク

【地上げ】の初歩の初歩の嫌がらせだ！読んで字の通り、ターゲット目標の家  
の窓から蛇を投げ入れたり、亜種として郵便ポストなどにイモ虫を  
大量にぶち込んだりするゾ！

精神的破壊力は抜群ダっ！特に女性によく効くゾ？

『ピザ屋にイタ電』

この世界のデリバリーを頼める飯屋・雑貨屋・薬屋・武器屋などが  
ターゲットら目標へ「何故か」大量に頼んだ覚えのない注文が届けられるとい  
う代物だ！  
いぢがいで

これをやられると地味に困るッ？

(この世界にピザ屋はない。電話もないが)

『騒音おばさんゴッコ』

黒塗りの街宣車のようなものでターゲット目標の家の前に堂々乗り付け、スピー  
カーから延々と目標の人格攻撃(悪口)を繰り返すゾ！

この世界に街宣車やスピーカーはないが、拡声魔法を使えるのでそ  
れで悪口や恥ずかしい過去を余すことなくご近所にお伝え出来るん  
だッ？

亜種として目前で洗濯ものなどを叩きながら

「引っ越し！引っ越し！さっさと引っ越し？シバくぞ」

と法に引っかからぬ様にヤル猛者もいるゾ！

この場合やる方、やられた方双方に大変な精神疲労をもたらす高等  
テクニクだ。注意しろッ？

ちなみにすべて俺が元いた世界から持ち込み伝えたモノだ！以上ッ？

~~~~~

「本当かねチミイ？」

俺は銀縁の方へと顎をしゃくつた。

「……確かに行過ぎた行為があつたことは認めます。しかし、これも自分達の仕事なのです！土地売りが土地を手に入れられなければ飯の食いあげになってしまう！勿論土地の権利書は『合法的』に手に入れたものです？」

『合法的』の前にI K A S A M Aギャンブルでが抜けとるよ。

「た、確かにそちらの言い分もあるでしょうが……『土地の権利書』はそちらにあつても『教会の権利』はこちらにあります！いきなり出ていけば失礼でしょう？」

我に理は有りとばかりに【教会の権利】を俺に示すシスター。

「ふう……」

（バレないようシスターの乳を横目で盗む見ながら）俺は書類に目を通し、わざとらしい溜息をついた。

問題をややこしくしているのは土地と教会の権利が別であるという点である。

本来この世界では土地を持つ者がその土地の建物も好き勝手に扱えるのだが

「この岩の上にわたしは教会を創ろう」

とこの世界の神がバカ言ってから、岩は人の物だがその上に建つ教会はバカの物という暗黙の了解があるのだ。

故にこのような争いが発生するのである。

そして、そこに俺のような「清く正しく美しい勇者」の調停人に出番が回ってくる。双方の言い分を聞きどちらが正しいのかを決するのである。

が、どちらかという今は【教会】の方が身びいきされている。単一の教会は怖くなくともバックにいる【大聖堂】の威光は絶大だからだ。

その証拠に俺が登場してから牛スターは若干安堵しているし、餓鬼どもは俺にキラキラとした瞳を向けてくる。うぜえ。

「ではこうしてはどうでしょう？まず乳。じゃなくてシスターが教会の権利を一旦地上げ屋さんにお譲りして、然る後地上げさんはわたしにこの教会と土地を売る。そしてわたしは神の欲するところを為す……というのは？」

俺はスライムを半日いたぶる時のような優しい微笑を浮かべて二人に提案した。

「えーと、自分はそれで一向に構いませんが……」

銀縁が戸惑った演技をしながら第一に賛成する。脚本通りだ。

「ゆ勇者様！それはもしかして？」

シスターがその巨乳を揺らして昂奮気味に椅子から立ち上がる。

「おそらく、貴方が考えておられる通りではないかと……今日ここにわたしが招かれたのも神の思し召しでしょうから」

俺はパイ乙の肩に手を置き出来るだけ誠実な笑みを浮かべた。

「ああ、嗚呼、やはり神は視ておられたのですね？有難う御座います！ありがとうございます！勇者様！」

ヤクでもキメてんのか？というくらい喜び俺の手を握ってくるシスター。

「じゃあチャツチャツとやっちゃいませうか」

俺はステンドグラスのそばにある『礫になっている男の像』を見上げ仕事の成功を確信した。

……
……
……

「はい……ではこれで、この教会と土地は社ちよ……ごほん。勇者様のモノとなります」

黒服は眼鏡をクイッとあげ書類を俺に渡した。

「うん。じゃッ、そろそろ帰るか！帰りに焼肉メシでもどう？」

ねぎらいも込めて黒服に声をかける。俺の言葉に、黒服も仕事が一段落ついたので和やかな笑みで頷いた。

「いいですねえ。あ、そういえば最近わたし総代せんせエに教えて頂いた『ゴルフウ』をやってるのですが、なかなかスコアが伸びなくて……スウィングの真似をしながら黒服は恥ずかしそうに笑う。

「ほう、いまいくつだね？」

「ようやく100を切ったところですよ」

褒めてほしそうに眼鏡クイクイすんな。

「いやいやそいつは大したモンだ。今度買い上げた土地に練習場でも造ろうと思つとるんだが……来るかね？」

「行きます」

間髪入れずに答える黒服。こやつかなりのスキモノのう。

ハッハッハッハッ！俺と黒服の上機嫌な笑い声がユニゾンで教会に響き渡った。

「あ……あの、勇者様？えっと……土地の権利書をお譲りして頂けるのでは？」

気づくと乳牛が俺の横に居た。

「あ、いたの？」

そうか忘れてたな。まだ仕事だった。

「シスターさん」

俺は迷える子羊の肩にガツシリ手を置いて慈愛の眼差しで彼女を見詰めた。

「は、はいッ？」

びくりと背を伸ばすシスター。

「神は仰つられました。

『嘘をつくことなかれ』とね。

しかし『欺くことなかれ』とは決して仰られてはいないので。

つまり嘘さえつかなければ、わたしがあなたを騙して教会を手に入れることも神は認可しているのですよ。

それは何故かというと神自身が詐欺師ペテンだからです。

神様ってのは、自分に都合の善いものは、奇蹟”ですべて片づけ、逆に具合の悪いものは”試練”で済ますマッチポンプ機構やっつけです。

つまりわたしがあなたを騙して、あなたが教会を失ったのもまた『神の試練』というやつですな」

シスターが気絶した。

やれやれ刺激が強すぎたか。

「おい、あとでこのシスターと小汚いガキども『大聖堂』宛に着払いで送つといて」

まあ後はなんとか向こうでやっていけるだろう。

黒服の手下に連絡してもらい、俺は教会を出る。

ふと、後ろを振り返ると光の射したステンドグラスを背景に『吊り下げられた男』がこちらを哀れんでいるように見えた……

王冠に輝く栄光

「そこでよー。俺は大魔王に言っただけだよ」

いつの間にか俺の周りには黒山の人だかりが出来ていた。

「今のは『あげぼよ』ではない。『ぼよ』だ……っでよー」

おおー、とどよめく一同。

「さすが勇者様だ……」

「まさか大魔王に『ぼよ』で勝たれてしまつとは!」

「すごいですわツ!勇者様?」

「ふむ。『ぼよ』系呪文ですか。ふむ、私も少しなら使えるのですがね。ふむ」

いや……お前らゼツテエー意味わかってねえだろ?

というか話してる俺ですら、自分で自分が何言ってるのか1パーも分からん。

特に一番目と最後のやつ。何だよ『ぼよ』系呪文って。『メラ』ばく云えばいいってモンじゃねえぞ!

赤い絨毯^{カーペット}。無駄にデカくて高そうなテーブル。その上に山と置かれた料理と酒。あと人人人。

そんな超高級ホテルの披露宴会場

ぼい中で俺は酒を飲んでた。食っては飲み、飲んで食って、たまに寄って来る貴族^{アホ}ども相手に法螺話を繰り返しているのだ。

何故こうなつたかというと……

【トルキスト王誕生祭のお知らせ】

俺の住むゴイールの森の木家ログに王族からの使者が来たのは二週間前のことだった。

なんでも現国王の誕生日を盛大に祝うパーティーがその日城で執り行われるらしい。そして、箔をつける為大魔王を倒した勇者である俺にも是ツ非ツ出席して欲しいとのことだ。

まあタダ飯タダ酒に招かれるのに否やはない。

しかし酒の肴に大魔王との死闘（笑）や国勇校での訓練内容などを話してくれというのが面倒くさい。

大魔王との戦いなんてコツチ転生してからは無かったし……即、無条件降伏だったからな。

「一度目に倒しに来た時みたくもう一度『世界の半分』のくだり聞かせて下さいよ？ん？」

つて大魔王さん（笑）にニヤニヤしながらお願いしたら

「サーセンしたああア？」

つて土下座されたし……

まあ、でっち上げて適当に場を盛り上げればいいんだろうが。

そう考え、やたら偉そうな態度で接してくる40台くらいの使者に

「おい走狗坊主メッセンジャーほーい。俺と対等な口キクなんざ10万年早えんだよ」

と顔面に握りつ屁をカマし、ついでに肩パンしてから彼の額に出席の を墨で点けて送り返しておいたのだ。

（彼こそ使者のなかの使者だ。他のやつも顔に要件書いとけ）

そして今現在、その誕生祭の真っ最中なのだが……

どうにも俺は王族？貴族といった連中が苦手だ。

「王族きぞくどもは着飾きざくってはいるが、性根が腐くっているので民草ヒヤッハーを搾取しして憚おそることはない。

しかも、それは先祖代々に渡り脈々と受け継がれて来たものだ。そもそも他人から掠め取った財で富を成した盗賊の親玉が豪族に成り自ら『王』を名乗ったのがこの国の王族はじまりの起源だ。

王侯貴族きしうは生産活動は何ひとつ出来ぬ上自分で自分のケツも拭けな
い。そのクセ権力には貪欲で余計なことばかりする……というニ
トにも勝る廃スベックくんこそ生産機だ。きっとその頭の中を搔かつ捌く
いてみれば脳みそではなく藁屑わらくずでも詰まっているのだろうな。

そんなワケだから、王とはそれら盗賊の中で一番腹黒くあさましい
者でありその子孫なれのはてはカス中のカス。キング。カスの王に相応しい。
キングスライムならまだ王としての威厳があるが、キングカスには
何もない。その頭に嵌められた王冠もカスの王であるコトを示す為
と中身の藁屑を隠す為に使われているだけだ。

しかし馬鹿の大将とはいえ、馬鹿でも歳はとるのでここはひとつ馬
鹿っぽく盛大に祝いわって差し上げよう」

いつの間にか俺の心の中の声が拡声魔法で会場に垂れ流されとった。

(あれ？いつのまに！)

何故か壇上に上がっている俺。

貴族どもの引きつった顔と赤い絨毯がユラユラしている。気づけば司会ばい人間と王の近衛が何人か俺のそばに倒れていた。

……おそろく。

壇上に王を登場させる前に『現王が如何に素晴らしいか人物であるか』という前口上を司会者がペラペラ延々と話す。ベロンベロンに酔った俺が長話に激昂。嘘ばっかつく司会を殴りとばす。拡声魔法を使い『王侯貴族が如何にカスであるか』を説教。警備の近衛兵慌てて止めにはいる。近衛兵も殴り倒す。俺言いたい放題……のコンボが決まったものとミエル。

「えー……、それではッご登場して貰いましょう！偉大なるトルキスト王ご本人です！どうぞー？」
場を無理矢理盛り上げる。

しかしというかやはりというか王は出て来なかった。
ひとが必死に頑張って会場の雰囲気のアゲアゲ。してるのに出て来ないたあふてえ野郎だ。

仕方ないので、気絶し倒れているジャパ　ットたかた風の司会を引
きずつてくる。

「今日から彼がこの国を治めることに相成りました！お誕生日おめでとごございます王様！ハイ、拍手ッ？」

会場にいる貴族全員を目で殺す。拍手カンスエイしなくとも明日の朝日が拝めると本気で思っているのか？

こうして

この日、東トルキス大王国に新しき王『たかた』(ジャパットの社長似だから)が誕生したのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9053z/>

二週目の勇者「俺」

2012年1月6日20時26分発行